



『人間動物関係論－多様な生命が共生する社会へ』

松木洋一 監修

2011年11月 養賢堂 発行

264頁

定価（本体 2,800円＋税）

金谷麻里杏・浅川満彦（酪農学園大学獣医学類）

酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の所属ゼミ生に、もし、興味のある動物群があるのなら、まず、関連の書籍を読み込み、その情報を根付かせるため、その書籍紹介を推奨してきた。これまでに、浅川と共著で爬虫類、猛禽類、有袋類、サル類、イタチ類などに関するものを作成した（橋本・浅川 2010、平山・浅川 2011、伊藤・浅川 2009、牛込・浅川 2009、篠田・浅川 2008）。実は、これは浅川が野生動物医学の授業作りのために行ってきた訓練の1つでもある。

ところで、本書評拙文の著者の1人、金谷は鳥類臨床医を目指している。明確な目標を持ってゼミに来てもらうのは、研究課題を絞り込む上で、指導教員としては大変助かる。当然、鳥類に関する書籍を読み込んでもらおうと思ったが、待てよ。鳥類臨床医にはできるだけ多様な受け皿を備える必要があるのでは。なかなか、野鳥は人間社会の身近にも多種が存在し、愛好家も多いが、一方で、害鳥として敵視するなど、本書のように人間との関わりが多様で深い。それならば、鳥類臨床医となる前に、本書のような幅広い分野を背景に持って頂き、その後専門性を極めて頂くことが適切であろう。そこで、彼女には本書の全体的な分析を行ってもらい、浅川が部分的に補足をした。（文責 浅川）

本書は序章「人間と動物の関係論について」から始まり、「野生動物と人の関わり」、「畜産動物と人の関わり」、「伴侶動物と人の関わり」、「人の医療・福祉補助としての動物」、「日本人と動物文化」の5章から構成される。序章では時代とともに変化する人と動物の関わり方、本書の構成と節ごとの内容を簡単に説明しており、序章を読むだけで本書の内容を大まかに把握することができた。また、章ごとにキーワードやコラムが記してあるので、

調べ物をしたい時などにも役立つだろう。人と動物の関係と一言で言ってもその関わり方は様々であるが、専門的な内容はもちろん、本書はそれを様々な視点から述べている。特に「日本人と動物文化」の章では、日本人の動物観を歴史的、国際的に比較し、日本人の行動や文化などの身近な観点から動物観がどのように変遷してきたかを述べており、読みやすい内容になっている。個人的には、「畜産動物と人の関わり」の章の第1節「動物はいかにして家畜になったか」が興味深く、動物が家畜となるための条件や、各種動物が人間と深く関わりあうまでの歴史が述べられていた。専門書としてだけでなく、一般読者も興味を持てるような身近な内容となっているのが本書の魅力といえよう。

残念な点を挙げるとすれば、やはり図が白黒であるせいか、読みづらいと感じてしまったところだろう。グラフや図での説明があるのは分かりやすいが、白黒であると一部見づらく、読者は敬遠してしまうかもしれない。何より写真も見づらいので、特に、第4章の第5節中の写真(197～202頁)においては鯉組織の壊死部分や病理組織像が分かりにくく、とても残念に思えた。

また、人と動物の関係という言葉で自分(金谷)が真っ先に思い浮かべたのが、野生動物と人との関係だった。これは恐らく、近年、人と野生動物との間での問題が絶えないこと、とりわけ、自分が野生動物の多い北海道に住んでいるためであると思われる。人が野生動物の住処を奪ったせいで、野生動物が人の生活環境に被害を及ぼすようになったのはよく知られるが、そもそもシカやサルはもともと平地で暮らしていて、明治期に人間の乱獲によって追いやられ、かろうじて人の手の届かない奥山で生き延びてきたのだという。「つまり、現在起こっている現象は、じつは野生動物がもとの分布域へ回復する途中経過」であるという。一方、高齢化や過疎化により野生動物との関わりが激減した農山村では、野生動物にとって人間が「優しい」生き物となり、野生動物の生活圏内への侵入を助長している。「すでに多くの地域では、いつでも野生動物たちが人間の生活圏へ出没してもおかしくない状況が出来上がっている」のである。これらの問題に加え、外来動物の問題も挙げられる。コラム「外来動物問題 アライグマによる生態系影響とその対策」(45～46頁)で述べられている通り、もともと野生動物だったアライグマを安易にペットとして輸入し、飼育困難という理由で野生に放逐したことで、農業被害や家屋の汚損被害、人獣共通感染症、日本の在来種への被害が生じている。都市化が進む今だからこそ、人間は改めて野生動物との距離を見直し、また、野生動物だけでなく人間が関わる全ての生命といかにうまく共生していくかが大きな課題である。本書はそ

のことを改めて認識させてくれるきっかけとなりうるだろう。

(文責 金谷)

鳥類の臨床医希望であるのだから、本書の中の鳥類の部分掘り起こすのかなと予想したが、まったく言及されなかった。なお、鳥類の内容としては次があった。希少種コウノトリの再導入(30～33頁)、赤色野鶏における家禽化の歴史(56～57頁)、養鶏場の動物福祉(頁77～78)、子供動物園・学校飼育鳥類と鳥インフルエンザによる影響(232～234頁)、江戸時代における鳥類保護令(252頁)。指導教員としては、広い視野を持って頂き、目論見通りで安堵はした。しかし、明らかに本書の内容は哺乳類(イヌ、ネコ、ウマとほか家畜、クジラ、アライグマなど外来性哺乳類)に軸足が置かれていた。もし、この傾向が人間動物関係論という学問からの投影であるのなら、そして、実学を目指すのであるのなら、愛護法(257頁)の射程である鳥類と爬虫類も、哺乳類同様、目配せすべきであろう。現状の優先順位的な背景から、哺乳類重視の傾向はよく理解はできるのだが。いけない、いけない。狭い視野にとらわれているのは、指導教員の方かも知れない。

(文責 浅川)

文 献

- 橋本幸江, 浅川満彦. 2010. 書評『ニホンカワウソ―絶滅に学ぶ保全生物学』, 日本生態学会ニュースレター, (21): 14-15.
- 平山琢朗, 浅川満彦. 2011. 書籍紹介『猛禽類学』, 野生動物医学会ニュースレター, (33): 35-36.
- 伊藤友貴, 浅川満彦. 2009. 書籍紹介『Medicine of Australian Mammals』, 同上, (29): 30-31.
- 牛込直人, 浅川満彦. 2009. 書籍紹介『Primates Parasite Ecology』, 同上, (29): 32-33.
- 篠田理恵, 浅川満彦. 2008. 書籍紹介『Infectious Diseases and Pathology of Reptiles』, 同上, (26): 32-33.
- 秋葉悠希, 浅川満彦. 2013. 書籍紹介『獣医学・応用動物科学系学生のための野生動物学』, 野生動物医学会ニュースレター (36): 22-24.
- 村瀬真弓, 伊藤友貴, 浅川満彦. 2008. 書籍紹介『野生動物の看護学』, 野生動物医学会ニュースレター (27): 39-40.